

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(6)

リレー随筆

甘藷（鳴門金時）

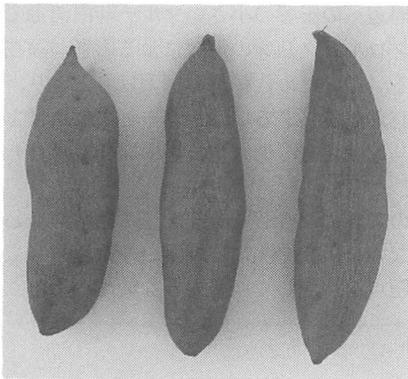
（徳島県立農業試験場病虫科 かないそやすお 金磯泰雄）

甘藷（サツマイモ）の昨今

昔は非常食であったイモが今や高嶺の花とはよく言ったもので、焼きイモに化けたイモの値段を聞いたとき、誰もわが耳を疑った経験があるのではなかろうか。下作な話だがイモを食べると「？」が出るのと良からぬイメージの面影は今や薄く、むしろ繊維質に富んだ健康食品との風評さえ漂う。時の流れとは真に不思議なものといえよう。

甘藷にはカライモ、リュウキュウイモなどの別名があるが、現在ではサツマイモと呼ぶのが一般的である。その名のとおり中国から1597年に初めて宮古島に入り、その後琉球で普及した。鹿児島へは1612年にルソン（フィリピン）から伝えられたようであるが、種イモ増殖などで普及したのは1705年以後とされる。しかし日本における本格的な栽培の歴史は、江戸時代享保年間の青木昆陽に始まることは学校の教科書などで馴染みのことである。そしてこのとき薩摩から種イモを取り寄せたため、サツマイモの名で全国に広がったといわれる。

栽培地域は南九州が最も盛んであるが、関東まで広く栽培されている。用途は食用、飼料用及びでんぷん用等幅広く、3割程度が食用として消費されている。ブランド名「鳴門金時」は高系14号から地元鳴門市で系統選抜されたもので、その名のとおり鮮やかな紅色の表皮は食欲をそそることこの上ない。



鳴門金時

地元農試の生い立ち

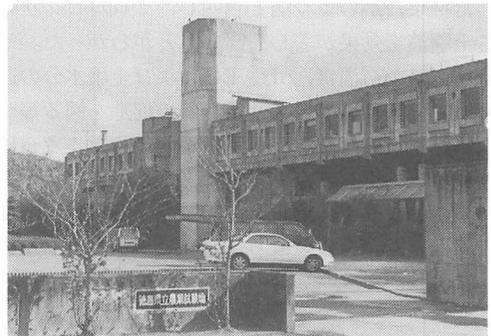
徳島県立農業試験場は明治26年に創設された農商務省農事試験場四国支場廃止のあとを受けて、明治36年に徳島県農事試験場として開設され、今日に至っている。この間に畜産、果樹部門の分離、独立および試験地の統廃合など数回の組織機構変更の後、昭和46年に現在地へ移転している。

周辺は野菜栽培の盛んな徳島市の近郊地帯で、水稻や酪農も多い。試験場の研究対象分野は水稻、麦、特用作物、野菜、花卉等幅広い分野を受け持っている。近年の主要研究テーマは、一言でいえば現場に根ざした実用的で効率的な農業技術の開発をめざすものであり、連作で種々の障害の見られるサツマイモの生産阻害要因の解明もその一つとなっている。

産地のあれこれ

徳島県北東部に位置する鳴門市を中心とする砂地畑栽培地帯では、サツマイモダイコンという農家から敬遠されがちな重量野菜が今なお基幹作物となっている。イモは古くから栽培されていたようであるが、上記のような作付体系となったのは青果用ダイコンが導入された昭和36年頃からのようである。

本地域の特異性は、何といても砂地畑にある。砂丘のような砂質の沖積地もあるが、積極的に海砂を入れた造成畑が多い。そうした圃場には海砂を50~60cmの高さに客入しているが、連作による砂の変成や風による散逸から、3~5年に1回は10a当たり約60m³の海砂を補充することが必要で、それにより生産性が低下することなく推移してきた。しかし近年客土する砂（地元では手入れ砂と称する）がだんだん少なくなり、産地を維持する上で大きな問題となりかけてい



徳島県立農業試験場

る。

サツマイモ栽培の変遷

明治～昭和35年まで一貫して主食の代用としての品種選抜であったことは、全国的に共通なものであろう。しかしこれと平行して、大正時代から青果用としての生産があったのは、京阪神に近い地理的要素があったからと思われる。その後昭和27～28年頃から早掘り栽培で経営の安定化が図られるようになり、30年以後は徳島県産野菜の中で常にトップクラスの品目となっている。因みに平成6年には栽培面積1,273 ha、生産収量3.1万t、販売額90億円で、ニンジンの103億円に次ぐ実績である。

鳴門金時の元となった高系14号は、昭和27～28年に初めて現地試験が行われ、早掘り用品種として定着した。さらに果梗の短いのがうけて、独特のさぐり掘り（マルチの中へ手を入れ、収穫可能なものから随時出荷する方法で、普通は7月頃から始まる）用品種として36～37年を境に地域全体に導入され、ここに品種が統一された。

その後しばらくの間は果梗が短い特性が災いすることがあり、乾燥年に丸イモ（球状のもので値段が安い）や表皮の日焼けが発生するなど、なお問題が残っていた。ところが早熟効果をねらったマルチ栽培により、こうした欠点が克服され、昭和55年以後は鳴門金時としてゆるぎない栽培産地となった。

生産を阻害するもの

イモは作りやすいものの代表作物のような品目ではあるが、連作するとやはり病害の発生被害は著しい。昔から黒あざ病や黒斑病などの被害防止のため、種イモ消毒に関する防除試験が幾度か試みられ、大過なくきていた。ところが昭和49～52年に突如としてイモの表面に1～2 cmの黒斑（かいよう病斑、通称あばた）が大発生し、産地全体を大きく揺さぶった。

これまでに見られなかった症状のため、原因究明を急いだ結果、かいよう病と判明し、クロルピクリンによる土壌消毒効果が著しく高いことがわかった。そのほか植付時の苗消毒、pH、ECおよび土壌水分の適正化による土壌環境の改善、苗活着の促進を図る等が重要な防止対策となることが明らかとなった。さらにマルチ栽培を利用して、クロルピクリンのガス抜きが不要で省力的なうえ、周辺への影響も小さい畦内消毒技術を開発した。その後直ちに畦立て→消毒→マルチン



定植挿苗直後のほ場風景

グが同時に可能な機械一貫作業体系が確立し、現在に至っている。

なお突発発生した病害については、7～8年前にアメリカで多く見られる放線菌に起因する立枯病であることが確認された。

産地の今後

ここ20年くらいは順調であったこの砂地栽培地帯でも、大きな二つの懸案事項を抱えてきている。

一つは、現在の品質、収量を維持するには、新しい海砂の客入が必要であるがそれが乏しくなっていることである。連作すると砂の粒子が細かくなり、保水性や排水性等物理性が劣化するとともに、pHや養分等化学性の悪化も確認されている。これらは栽培の根幹に関わることだけに事態は深刻で、各種の砂が比較検討されているが、現在までのところ海砂に優るものは見つかっていない。今後は砂とともに他の代替資材の探索も必要となろう。

今一つの問題は、連作が進んでいるため土壌病害虫の汚染が進み、土壌消毒が欠かせないことである。センチュウ類については数種の薬剤に効果があり代替剤に苦労しないが、立枯病にはクロルピクリンほど特効的な薬剤は見当たらない。そのうえ一部では混住化が進み、周辺への影響の小さいマルチ畦内消毒でも、時としてクロルピクリンの飛散による影響が顕在化し始めている。このため代替剤の探索はもとより、立枯病防除に有効な資材あるいはそれらとの併用によるクロルピクリン使用量の低減化技術の開発が急務となっている。

以上のように、「鳴門金時」を巡る諸情勢は必ずしも芳しくない。研究機関には地元と一致協力して、こうした問題点を解決してゆく大きな使命があろう。